

鈴木有郷牧師説教

## 7/18/10 「マリアとマルタとイエス」 ルカ10:38-42

主イエスの思いにかなった人間らしい人間とはどのような存在なのでしょう。

その具体例として、マルタの妹マリアを挙げることができます。

ある日、主イエスは、マルタとマリアの家に招かれました。姉のマルタはイエスに喜んでもらおうと家の中をきれいにし、ごちそうを作るために忙しく働いていました。妹のマリアは、その間ずっとイエスの足下に座って、イエスの言葉を一つも聞き漏らすまいと神経を集中していました。

マルタはその妹の姿を見て、気分を損ねます。私は大切な先生を喜ばせようと一生懸命なのに、妹は手伝おうともしない。先生の足下に座ったままだ。

マルタはイエスの話しをさえぎって妹に対する不満をぶちまけます。「こんなに私が働いているのに、妹は私を助けようともせず、先生の側に座ったままです。私を手伝うように言ってください。」

このマルタをイエスは優しく諭します。「マルタ、マルタ。あなたはいつでもよいことに思い悩み、心を乱している。必要なことはただ一つ。マリアはそれを選んだ。彼女からそれを取り上げてはならない。」

イエスを家に招待した二人の姉妹のどこが違うのでしょうか。

当時のユダヤ社会において、女性は男性の陰に隠れた存在でした。

例えば、女性は公共の場で男性と口を聞くことはできませんでした。いつも外ではベールを顔にかけ、家族以外の人と外で食事をするのも許されませんでした。鍋を焦がしただけで離婚されても文句は言えませんでした。

マリアとマルタがイエスを家に迎え入れたということが、まさに当時の社会的常識に反するものであったことは、間違いありません。

しかしマルタとマリアのイエス歓待の仕方は違っていました。

マリアは、主イエスの足下に座って、イエスの言葉を一言も聞き逃すまいと一生懸命でした。

一方マルタは、イエスを招いたからには、まず家の中をきれいにし、たくさんごちそうを用意しなければならぬと考えました。

マリアの関心の焦点はイエス自身にあり、マルタの関心の焦点は、家を整頓し、ごちそうを作ることにあったのです。

つまり、マリアは男尊女卑社会から完全に解放された存在でした。マルタは、イエスを家に招くという事で男尊女卑社会に抗したとは言うものの、男性にはまず食事を、という当時の風習、しがらみから自由ではありませんでした。

言い換えれば、マリアはイエスに完全にコミットしており、マルタは、イエスへの忠誠60%、社会的風習に40%というところではなかったのでしょうか。

それが故に、マルタは折角イエスを家に迎え入れたにも関わらず、苛立ち、心を乱してしまったのです。

姉マルタがなく、妹マリアにあったのは、信仰の一途さでした。何を置いてもイエスと直接向き合うか、それともまず家の中を掃除するか、二人の姉妹の根本的な違いがそこにあります。

このエピソードは、私たちにどのような意味を持っているのでしょうか。少なくとも二つあると思います。

一つ、それは、私たちはマリアではなく、マルタなのだという自己認識であり、自己反省です。私たちが自分自身に正直である限り、この結論を回避することはできません。

そして二つ目、それは、マルタである私たちを、主は限りない慈しみの眼差しで見つめたまうということです。

イエスはマルタに優しく二度も呼びかけておられます。「マルタ、マルタ。」

聖書において相手の名前を二回続けて呼ぶのは、呼びかけた相手をいたわり、慈しんでいることを意味します。

イエスはマルタを慈しみ、彼女がマリアのように自分の足下に座るように説得し、呼びかけておられるのです。

主イエスは私達に呼びかけておられます。「まず何を置いても私の言葉に耳を傾けなさい。私の言葉を聞きなさい。私に心を開きなさい。そしてそれを踏み台に、自分に正直に、他者に優しさの眼差しで接しなさい。あなたはそれで十分。後は私が引き受けた。」